

環境先進国

ドイツから学ぶ

吉田 浩巳

7



ドイツにおける環境問題への取り組みの大きな転換期として1970年があげられます。

この年の夏にライン川の魚が飛び上がるという事件が起きました。これは、川の水質が悪くなり、そのことにより水中の酸素がなくなり、呼吸できなくなった魚が飛び上がり、酸欠で死んでいきました。この事件までは、ドイツには河川に関して法律がありませんでした。

ライン川は国際河川でスイ

なくなっており、生物の許容量がリミットになっていたにも関わらず、生物学者がだれも対処しなかった経緯があり、それだけ自然に対する意識が低かったといえます。

また、当時は空気や水、生物にいたるまで、人間が何をやっても大丈夫という意識があったとホーン氏は語ってくれました。

空気は、いつもある物で減らないもの、目に見えないし、限りなくあるように思われていますが、今では見えないも

転換期は1970年

川の水質悪化で魚死ぬ

ス、ドイツ、フランス、オランダを流れており、この流域に1億人が住んでいます。このころには魚の多様性も既に

のでも無限ではないとみんなが分かっています。この夏の事件が転換期となり、環境に関する全ての分野で市民が声

を上げ、行政が動き始めました。

特に州ごとに法律ができ始めました。例えば、家庭排水が3年以内に100%浄化施設につないで浄化後、川に流さなければならぬことなど、違反していれば罰金も課せられるようになりました。

こういった河川や森林に関する問題は、当初、産業界から猛烈な反対がありました。理由は、設定された環境基準をクリアするためには多額の投資が必要になり、コストがかかりすぎるということでした。

しかしながら、発展した工業国では、水はますます重要



歩道がなくても自転車のレーンがある。環境にやさしい移動手段としての自転車の普及を行政が後押ししている

な役割を果たすことは間違いない。法律できっちり規制をしなければ将来、もっと高くついてとり返しがつかなくなるということを行政が国民や企業に向けて発信しました。水質については一例ですが、空気やほかの分野でも同じことが言えます。例えば、この近くにセメント工場があり、近くに住んでいる住民が洗濯物を干すと、すぐに汚れる状態でした。こういったとんでもない状況が、法律制定につながった国といえます。

また、「母乳からも有害物質が出るようになったことがきっかけで、将来が危ぶまれる乳児が増える危機感を抱える母親が動き出したこともありました」とホーン所長は熱く語ってくれました。

(社団法人まちづくり国際交流センター理事長)

毎週水曜日掲載